

現象化能力の育成について

On Cultivation of Ability to Phenomenalize Things

丸山 博道

Hiramichi Maruyama

目次

- I. はじめに - 現象化のための実践教育の必要性について
- II. 分析対象
- III. 独自の意味を持つフィールド
- IV. 全方位的であるという意味
- V. 布置関係の中に現象化する事態性
- VI. 布置関係の固有な立体性
- VII. 自己分析のための DB
- VIII. おわりに - DB 分析の教えるもの

I. はじめに - 現象化のための実践教育の必要性について

Maurice Merleau-Ponty は「人間のうちなる形而上学 (Le Métaphysique dans l'Homme , Revue de Métaphysique et Morale , 52 , 1947)」¹⁾において「存在を現象化する当のもの」を形而上学として定式化した。そこには方法的探索が欠落していたので、筆者は、「個のうちなる普遍について」(2001)²⁾において、その方法的探索の試みを行った。「存在を現象化する当のもの」とは、まさに「生きた Gestalt」の把握ということであるが、その把握のためには、幾つかの複雑なプロセスを経なければならなかった。そうしたプロセスを教育することは、むろん不可能ではなからうが、短期に端的に教えることは、不可能であるように思ってきた。

筆者は、これまでこうした現象化能力の必要を強く感じてきてはいたが、それは、幼児期からの観察習慣こそが重要であると考えていたので、そのための具体的な教育スケジュールまでは考えていなかった、しかし最近になって、学生たちの現象化能力の低さを改めて実感し、放置できないという思いを強くしたのである。それは、ある大学の2・3年生を対象としたデータベース(DB)のクラスのことであった。このクラスでは、例年最終段階で課題発表をすることになっており、その時は、あるDBを分析して、記録者の抱いている苦しみを明確に裏付けよという課題が与えられた。ところが、十分に分析できた学生は、きわめて少なかったのである。その想定外の事態に遭遇して、当初はむろん、DBの基礎力を十分教育できていなかったことを反省したわけであるが、改めて、彼らの提出物を吟味してみると、単にDBが未消化で

あるというより、むしろ、何をどのように分析すれば、どのような事態が見えてくるのかといった展望を欠いているということが、より重大な原因であることが分かってきたのである。要するに、それがなければクエリーのデザインが不可能であるところの当のものを、欠いていたのである。

当短大においても、自己紹介文を書かせてみれば、ほんの数行の記述しか行えない学生が少なからずいるわけで、やはり彼らも、何を観察すれば、自己というものが見えてくるのかを知らないのであるから、まったく同根の事態が存在していると言うべきである。要するに、どの学生であれ、事態を現象化する能力が育っているとは言えないということである。考えてみれば、現象化のための教育などというものは、学校では、全くなされてこなかったと言うべきである。しかし、己の眼で、事態性を現象化できないとすれば、彼らは、他者による解釈の波間に漂流し、ばかばかしい権威の下に吹きだまり、挙句の果てに、真実から疎外される運命を背負わされることになる。そうした自律とは程遠い存在の産生を以って、社会的人材の養成などと言うことは断じてできないであろう。

筆者が経験したクラスで、特に現象化の能力が低かった学生たちは、己の思惑・己の予断への囚われが強く、データに沿って物事を解釈しようとする姿勢が身につけていなかった。彼らは己の権力性によって、既に真実から疎外されているのである。彼らに必要なことは、事態を現象化する方法を身につけることである。それによって実際に真実に導かれる経験こそが、彼らを己の権力性から救い取ることに繋がっていくはずである³⁾。むしろ、手遅れであるかもしれない。こういう能力は、幼児期からの生活習慣として培ってくる必要があったからである。己の権力性を繰り延べながら事態の現象化を行うことは、むしろ躰の領域とも言えるだろう。

ノルウェイの環境哲学者 Arne Naess が、「大自己実現を！」⁴⁾と唱えても、今のこの日本には、transpersonal な文化的素地が失われてしまっている。実際、ひきこもりやニートの問題は、そうした状態にある若者自身が、己の苦しみの事態性を現象化できないために、解決のめどを失っているからこそ長期化しているのである。折角この奇妙な社会を忌避しながら、新しい社会の創造に向かって行けないというのは、いかにも残念と言うほかはない。啓蒙の再生⁵⁾が、叫ばれる所以でもある。Adorno の否定弁証法⁶⁾ といい、筆者の生態学的存在論^{7) 8)} といい、それは事態を全方位的な関係性のネットワークとして把握することを提唱するものであるが、できれば多くの言葉を弄することなく、そうした把握の方法を実践的・試行錯誤的に教えていくことを考えねばならない。

こうして、現象化能力の育成を、教育スケジュールに組み込む必要性が認識されれば、DB 演習の再構築を目指すばかりである。DB 分析は、よいデータさえ入手できれば、こうした教育には、この上ない手段を提供する可能性を持っている。しかしながら、その現象化の方法というものは、全方位的な関係性を把握しながら、「生きた Gestalt」をつかみ出すという厄介な代物である。「生きた Gestalt」は、事態の中に自ら存在するというよりも、われわれの認知の特質に適ったものとして、データに即して構成されるべきものである。その構成は、決して狭い自

己に同一化してはならず，かならずや発見的なものでありながら，それでいて，深く了解的なものでなくてはならない．さて，如何に教えるべきか．小論はその試みの出発点である．

II. 分析対象

この小論では，1つのリレーショナル・データベース（RDB）を例に，事態の現象化の試行錯誤のプロセスを具体的に論じてみたいと思う．このDBは，以下の3つの述語スキーマ，すなわち，「視聴する」，「同伴する」，「出演する」から構成された複合DBである．各述語スキーマに対して，それぞれ1つの基本DBを表す関係スキーマが与えられている．その括弧の前に付けられた名称は，テーブル名であり，その括弧の中に，そのテーブルを構成するフィールドのリストが与えられている．また，太字で書かれたフィールドは，主キーである．ちなみに，リレーショナル・データベースとは，正規化，コード化，一意化の各原則⁹⁾を踏まえた，テーブル（表）の集合である．

1. 視聴した（その日は，いつ_どこで_なぜ_何々を_どのように）

視聴（**視聴コード**，**視聴日**）

視聴明細（**視聴コード**，**番組コード**，**開始時刻**，**終了時刻**，**視聴場所**，**理由コード**，**評価コード**，**同伴コード**）

理由（**理由コード**，**理由**）

評価（**評価コード**，**評価**）

番組（**番組コード**，**番組名**，**ジャンルコード**，**製作局**）

ジャンル（**ジャンルコード**，**ジャンル名**）

2. 同伴した（いつ，どの番組を，誰々と）

同伴（**同伴コード**，**同伴日**，**番組コード**）

同伴明細（**同伴コード**，**同伴者コード**）

同伴者（**同伴者コード**，**同伴者**）

3. 出演した（いつ，どの番組に，誰々が）

出演（**出演コード**，**放送日**，**番組コード**）

出演明細（**出演コード**，**出演者コード**）

出演者（**出演者コード**，**出演者名**）

フィールドのデータ型，それにリレーションシップについては，細々記述しないが，然るべく定義されているものと，了解していただきたい．このDBは，ある記録者が，自分の視聴したTV番組と，一緒に視聴した仲間と，代表的な出演者とを日単位で記録することを想定したものである．

III. 実質的な意味を持つフィールド

この DB には数多くのコードが利用されているが、コードは基本的に、頻繁に記録される運命にあるデータの入力ミスによる不整合を防ぐ目的で導入されたものであるから、それ自身が、何らかの意味を持つというものではない。しかし、たとえば、評価よりも、評価コードの方が、事態を数量化しやすいということがあれば、例外的にコードが採り上げられることもある。それ自身が意味を持つ概念は、次の 13 個である。

視聴日	開始時刻	終了時刻	視聴場所	理由	評価コード
番組名	ジャンル名	製作局			
同伴日	同伴者				
放送日	出演者				

しかし、意味的には、視聴日と同伴日と放送日は、同一でなければならないから、11 個が意味のある項目である。

ところで、視聴日というものは、記録の指標としては極めて重要なものであるが、記録者の視聴行動の性格を浮かび上がらせようとするれば、視聴行動の週間的周期性を見越して、視聴日を曜日に変換し、曜日ごとの平均的視聴行動が見やすい形にすることが賢明である。また、開始時刻と終了時刻を考える代わりに、開始時刻と視聴時間を考えても、同等であろうし、視聴時間そのものが、視聴行動の良き指標になりうるから、これを採用する。さらに、視聴開始時刻には、視聴する側の都合によって、その都度変動もありうるから、朝・昼・午後・夜・深夜などの時間帯に変換しておくことが、骨太の視聴行動を浮かび上がらせるのに役立つはずである。以上をまとめると、次のような項目の集合になる。

曜日	時間帯	視聴時間	視聴場所	理由	評価コード
番組名	ジャンル名	製作局			
同伴者					
出演者					

IV. 全方位的であるという意味

こうして変換された項目によれば、次のような記録になる。

1. 何曜日のどの時間帯に(いつ),
2. 何処で,
3. いかなる理由で,
4. どの局が作った, いかなるジャンルの, どのような番組を,
5. 何分間見て,

6. どのような評価をしたか。

7. その時、誰と同伴したか。

そして、

8. その番組には、どんな人たちが出演していたか。

こうした記録の一覧を DB から取り出すことは容易であるが、多くの項目からなる一覧表そのものは、上の 1~8 のスキーマによって、ようやく、意味を有する記述となりうるものであって、まだまだ記録者の視聴行動の性格（傾向性）を明示するものにはなりえていない。すなわち、それは必ずしも、事態の把握が達成されたというレベルでの「生きた Gestalt」と言えるものではない。それに引き換え、もし、週間の平均的視聴行動、すなわち、何曜日の中のどの時間帯においては、いかなるジャンルの番組を平均何本、平均何分、平均どの程度の評価をしながら視聴しているかというようなことが明示されれば、われわれは、記録者の骨太の行動形態を把握したと言えるであろう。こうした内容は、あくまでもデータに則ったものでありながら、単なる記録ではない、むしろ「生きた Gestalt」を構成するように処理されたものと言えるであろう。われわれ人間は、了解しうる諸概念の布置関係（Konstellation/Gestalt/Schema）を経験的に作り出し、それを繰り返すことで事態の把握を行っている。そうした経験的所産自体は、極めて自己同一的なものではあるが、それによって生成される結果は、発見的かつ了解的なものである。

しかしながら、こうした目標的な Gestalt が初めから強調され過ぎると、全方位的な視点を見失う可能性がある。そして、まだ十分「生きた Gestalt」を培っていない学生にとっては、手の出しようがないことにもなる。したがって、われわれは「生きた Gestalt」自体を、改めて全方位的に模索するという姿勢を採った方がよい。それはある程度機械的に、定性項目の 0 項、1 項、2 項、…といった組み合わせを作り、定量項目から作られた量を測度として、その関係性の強度を見積もって行くといった方法であろう。われわれはこうして得られた結果の中から、発見的でありながら、深く了解的なものを選び取って行けばよいのである。

たしかに、これは方向としては正しい方法ではある。しかしながら、こうした機械的組み合わせの数は、0 項の組み合わせが、1 通り、1 項の組み合わせが、 n 通り、2 項の組み合わせが nC_2 通り、…そして全部で 2^n 通りあることを忘れてはならない。したがって、われわれは可能な限り定性項目数 n を減らすことを考えねばならない。たとえば、曜日と時間帯を「いつ」という概念のもとに集約するとか、製作局・ジャンル・番組名を、必要が生まれるまで「番組」という概念で括っておくとか、するのである。すると、定性項目は 6 個となり、機械的には、次のページの $2^6 = 64$ 通りの組み合わせが作られる。ここで、0 項とは、定量項目だけの統計結果を、その他は、記述された項目データで条件付けられた統計結果を見ようとするものである。たとえば、「いつ-番組」の場合、何曜日の中のどの時間帯では、どんな番組を、平均何回、平均何分、平均どの程度の評価をしながら視聴しているのかということ、すなわち、記録者の平均的

な視聴行動を見ようとしているのである。

1. 0項の組み合わせ

2. 1項の組み合わせ

いつ	場所	番組	理由	同伴者	出演者
----	----	----	----	-----	-----

3. 2項の組み合わせ

いつ-場所	いつ-番組	いつ-理由	いつ-同伴者	いつ-出演者
	場所-番組	場所-理由	場所-同伴者	場所-出演者
		番組-理由	番組-同伴者	番組-出演者
			理由-同伴者	理由-出演者
				同伴-出演者

4. 3項の組み合わせ

いつ-場所-番組	いつ-場所-理由	いつ-場所-同伴者	いつ-場所-出演者
	いつ-番組-理由	いつ-番組-同伴者	いつ-番組-出演者
		いつ-理由-同伴者	いつ-理由-出演者
			いつ-同伴者-出演者
	場所-番組-理由	場所-番組-同伴者	場所-番組-出演者
		場所-理由-同伴者	場所-理由-出演者
			場所-同伴者-出演者
		番組-理由-同伴者	番組-理由-出演者
			番組-同伴者-出演者
			理由-同伴者-出演者

5. 4項の組み合わせ

いつ-場所-番組-理由	いつ-場所-番組-同伴者	いつ-場所-番組-出演者
	いつ-場所-理由-同伴者	いつ-場所-理由-出演者
		いつ-場所-同伴者-出演者
	いつ-番組-理由-同伴者	いつ-番組-理由-出演者
		いつ-番組-同伴者-出演者
		いつ-理由-同伴者-出演者
	場所-番組-理由-同伴者	場所-番組-理由-出演者
		場所-番組-同伴者-出演者
		場所-理由-同伴者-出演者
		番組-理由-同伴者-出演者

6. 5項の組み合わせ

いつ-場所-番組-理由-同伴者	いつ-場所-番組-理由-出演者
	いつ-場所-番組-同伴者-出演者
	いつ-場所-理由-同伴者-出演者
	いつ-番組-理由-同伴者-出演者
	場所-番組-理由-同伴者-出演者

7. 6項の組み合わせ

いつ-場所-番組-理由-同伴者-出演者

こうした機械的な方法は、稚拙に見えるかもしれないが、経験主義という自己同一的権力性によって、全方位的視点が曇らされることから、われわれを救い出してくれるし、経験のない事態においても、果敢に分析を進めることを可能にしてくれるのである。ただ、こうして分析された事態性も、まだ「生きた Gestalt」と結びついているとは限らない。特に多項関係を調べる場合には、ピボットグラフのレイアウトばかりでなく、ページ要素にいかなる制限を加えるかということによって、見ている事態の局面が大きく変化するという事に注意せねばならない。

その時、項目の羅列に「理由」などが含まれる場合には、因果的・論理的なスキーマによって一つの文を構成するようにすると「生きた Gestalt」に接近しやすいということがある。たとえば、「場所-番組-理由-出演者」などは、「いかなる理由で視聴する時に、この記録者は、どういう場所で、どんな人が出演する、どんな番組を、どのように見たのか」と言い換えてみるのである。ここで、「どのように見るのか」は、番組視聴回数・視聴合計時間・平均評価などで表現されることになる。しかし、実際に分析しているうちに、こうした因果的スキーマ以外の別の関心が紛れ込んできて、たとえば、ある連続番組に出演している出演者の平均評価の分析に移ってしまったりすると、これは「番組-出演者」の局面に舞い戻ってしまうことになるので、常に新しい局面を見ようとする姿勢が大切になる。こうした時に、自己の権力性との闘いが起きるのである。

ところで「どのように見るのか」について、番組視聴回数・視聴合計時間・平均評価などを3通りに表現することも悪くはないが、記録者の利益感が反映するような新たな量を用意できれば、表現として端的である。たとえば、視聴時間と評価コードとの積に比例するように利得を定義するのである。この場合には、評価というのは、番組から受ける利得ではなく、構成や取材の綿密さ、それに感動の濃さといった番組の密度に近いものであると解釈する。したがって、評価コードの平均を求めるには、利得の合計を視聴時間の合計で割らねばならない。さらに、満足度を、視聴時間と評価コードの偏差の積に比例するように定義すれば、満足/不満足の間を量的に与えることもできる。

V. 布置関係の中に現象化する事態性

上記のような分析を行うには、64種類のクエリー（SQL）を実際に作ることになるが、それは、多少エネルギーを要することではあっても、決して難しいというものではない。これよりもむしろ難しいのは、ダイナセットを、如何に「生きた Gestalt」に結びつけるかというところにある。われわれは通常、このダイナセットに基づいて、ピボットテーブルやピボットグラフを作ることになるが、その時最も試行錯誤せねばならないのは、そのレイアウトである。そのレイアウトには、既に、たとえば、論理や因果（～の理由デアル）、時空の座標（いつデアル、～の場所デアル）、それに運動感覚的な述語（見ル・出演スル・同伴スル）等の「生きた/Gestalt」が反映するはずであるから、もし、こうしたスキーマの持ち合わせがなければ、まずもって、いかなる事態も現象化できないであろう。

われわれは、こうした述語スキーマのもとで、項目の組み合わせに意味を持たせながら、「生きた Gestalt」を生成し、それに沿ってテーブル/グラフを生成する。そして、逆にそれらが、その Gestalt にそって読み取られるときに、事態の局面が現出するのである。まさに、事態の観測量である諸項目（諸概念）の布置関係が、「生きた Gestalt」を構成することによって、事態性が現象化してくるのである。

しかし、それは何故なのであろうか。なぜ、ある事態に関する諸概念が、ある関係で結ばれるときに、事態の局面が現れてくるのであろうか。事態は紛れもなくすでに存在しているものであるから、それはわれわれ人間の認知の仕組みから理解されねばならないことである。筆者は、次のように考えている。すなわち、われわれは、経験を通して述語のスキーマを多数身体化していて、それらを直接的/比喩的に適用して、事態を掌握しているのであるが、述語は、諸概念を統合して、一つの意味を作り出す作用があるので、ある事態に関する幾つかの観測量が、ある身体化された述語が見出されてそのスキーマに絡め取られる時に、一つの意味を現出するのであると。

しかし、述語の統合機能とは、実は言語空間上の見かけの効果に過ぎない。要するに、述語というものは、身体が経験する特殊な類型的事態の名称のようなものであるから、述語スキーマとは、実は、その特殊な小事態そのものなのである。したがって、われわれは、事態の局面をそれぞれ固有の構造を持った典型的な小事態「生きた Gestalt」に還元しながら、理解しているということになるのである。

「布置関係の中に事態性が現象化する」というのは、「事態の局所に適合する典型的な小事態を見出す時に、その局所的な事態が了解される」という意味なのである。また、事態に関する全観測量の全組み合わせを考えるということは、観測体制が許す最も詳細な全方位的な局所を生成するということなのである。

VI. 布置関係の固有な立体性

ただし、項目数が多くなると、次第に 1 つの典型的な小事態として括りにくくなる。「いつ-理由-場所-番組-同伴者-出演者」では、もともと事態は、視聴する、同伴する、出演するという 3 つの述語が絡んでいるのであるから、本来別の述語に属する項目を統合するには、新たな述語が、その都度、考案されねばならないし、それが端的でなければ、「生きた Gestalt」にはなりえないのである。

そこで、考えられるのが、項目を 1 つずつ外に出して、その項目固有のスキーマで、残りの項目で指定される事態を、統括するという方法である。「いつ-理由-場所-番組-同伴者-出演者」の場合には、次の 6 スキーマを考えることになる。

1. [いつ]-[理由-場所-番組-同伴者-出演者]
 こうした理由で、こうした場所で、こうした同伴者たちと、こうした出演者の出る、こうした番組を見るのは、何曜日のどの時間帯デアルか。
2. [理由]-[いつ-場所-番組-同伴者-出演者]
 何曜日のどの時間帯に、この場所で、こうした人たちと一緒に、こうした人たちの出る、こうした番組を見るのは、どのような理由デアルか。
3. [場所]-[いつ-理由-番組-同伴者-出演者]
 何曜日のどの時間帯に、こうした理由で、こうした人たちと一緒に、こうした人たちの出る、こうした番組を見るのは、何処デアルか。
4. [番組]-[いつ-理由-場所-同伴者-出演者]
 何曜日のどの時間帯に、こうした理由で、こうした場所で、こうした人たちと一緒に見る、こうした人たちの出る番組とは、何デアルか。
5. [同伴者]-[いつ-理由-場所-番組-出演者]
 何曜日のどの時間帯に、こうした理由で、こうした場所で、こうした人たちの出る番組は、誰と同伴スルのか。
6. [出演者]-[いつ-理由-場所-番組-同伴者]
 何曜日のどの時間帯に、こうした理由で、こうした場所で、こうした人たちと見る番組には、どんな人が出演スルのか。

たとえば、1. [いつ]-[理由-場所-番組-同伴者-出演者] のグラフィメーは、ページフィールドに、理由、場所、同伴者を配置し、項目フィールド（x 軸）に番組（製作局_ジャンル_番組名）と出演者名を配置し、系列フィールド（凡例）に、曜日_時間帯（いつ）を配置した上で、理由_場所_同伴者それに、出演者を指定すれば、その出演番組に対する記録者の利得（y 軸）が、曜日_時間帯別の利得として表示される。したがって、利得の大きな曜日_時間帯が主たる時間帯であると読み取ることができる。

このように最初にスキーマを決めてから、分析を進める方法は、ピボットテーブル/グラフの

レイアウトの構成に対して明確な指針を与えることになる。また、クエリーにおいて、残りの項目を減らしていくと、その都度、新たなスキーマの模索なしに、半自動的に、全方位的な関係分析を進めることができる。分析としては、ある意味効率的であるが、現象化の教育としては、その都度、いろいろなスキーマを考案する必要がある第 4 章で述べた機械的組み合わせの方法も捨て難いものである。

VII. 自己分析のための DB

存在性というものは、世界との関係の中にその姿を現す。たとえば、われわれが、移り変わる周囲の状況に対して、どのような感情が惹き起こされ、どんな行動を選択したのかを記録していけば、状況の解釈の仕方、その解釈された意味に対する反応の仕方、そしてその反応を統制している原理までもが推測できる可能性がある。そこで、次のような 2 つの述語スキーマからなる複合データベースを考えてみよう。

1. 記録する（その日は、いつ_誰それと_どのような交流をして_どのような感情が惹き起こされ_どのような行動を行ったか）
認知行動（記録コード，記録日）
認知行動明細（記録コード，交流コード，感情コード，行動コード，類似経験頻度）
感情（感情コード，感情，感情強度，感情説明）
行動（行動コード，行動，行動欲求強度，行動説明）
2. 交流する（いつ，どれほど長く，誰々と_どのように）
交流（交流コード，交流日，時間帯，交流時間，交流区分コード，交流内容）
交流者明細（交流コード，交流者コード）
交流者（交流者コード，交流者名，関係）
交流区分（交流区分コード，交流区分名）

この記録は、日記のように、その日起こった幾つかの交流を記録するものである。各交流の相手は複数記述できるようにしている。そこでどのような区分に入る交流が行われたのかを記録する。さらに、その交流の詳細な内容も記録する。そしてその結果、惹き起こされた感情に、名称をつけると共に、その強さを評価し、感情説明を書く。同様に、その結果、どのような行動を採ったのか、その行動に名称をつけ、行動欲求の強さを評価し、行動説明を書く。また、類似経験の頻度を記入する。

こうした DB の定性項目は、

いつ（記録日，時間帯）	交流者	交流（区分，内容）	感情	行動
-------------	-----	-----------	----	----

であるから、前章の結果から、1 項目ずつ分離して、それぞれの固有スキーマを中心に分析す

ればよいことが分かる。

1. いつのことか
2. 誰々との交流であったか
3. どのような交流の結果であったのか
4. どのような感情が惹き起こされたのか
5. どのような行動をとったか

また、この DB には、交流時間、感情強度、行動欲求強度、類似経験頻度など多くの定量項目があるが、こうした諸量から、新たな指標を構成したり、相関を模索したりすることも、事態性の現象化には欠かせないことである。

ところで、若者は、己を統制しているものについて十分な認識を有していないことが多く、そのために、時に誤った幸福への戦略を抱いてしまうことがある。本来ならば、こうした DB を自ら作り、記録し、分析するという姿勢が欲しいものである。教育というものが、社会ではなく、個人の成長・発展を期するものならば、当然行われて然るべきことが為されていない。そのために、自ら行うことを期待するのは、もはや不可能な事態になってしまっている。学校教育とは、実にあからさまに、社会の成長・発展のために、国家が統制し、そして学校が進んでそれにおもねったところに存在しているのである。

しかし、それでは当然、教育として破綻する運命にある。個人の基礎力がここまで低下すると、一つの教育上の困難を克服しようとする自体が、教育に新たな障害をもたらしてくる。筆者は、従来、こうした自我に関わる自己分析には、時系列的なエピソード記録として文章化されたものを使ってきた。ところが、年々、文章を書くことを厭う学生が増え、記録の簡便化を考えざるを得なくなってきたので、上のような DB を想定した記録用紙への切り替えを考えたのである。

しかしその時には、いろいろな問題が起こってくることを覚悟せねばならない。第一に、そうした記入用紙を用いることは、自己を現象化するために、何を記録すればよいのかを、彼らの思考から排除してしまうことになる。分析シートなどというものは何であれ、自己分析を専門家の独占物に、したがって、一種の神話にしてしまうことなのだ。第二に、多くの項目で類型化を進めねばならないだろうが、それは生の記述なればこそ見えてくる微妙なスキーマの違いを無視するとことになる。それは学生を、個として観るのではなく、平均化されたものに卑しめることである。教育現場としては、できれば、このような DB 化はしたくないものである。時間がかかっても、分析の仕組みを理解させながら、文章化を督促する方が、教育的なのではないかと思う。

しかし、余談ではあるが、治療の現場においては、こうした種類の DB の可能性を追求しておく必要はあるのかもしれない。それは、精神科においては、汎用の電子カルテの使い勝手が良くないと言う声が多いらしいが、電子化のメリットは無視できないのであるから、より適合

したものを模索する必要があるからである。データに基づいた認知行動論的的確な診断システムができれば、最終的に、医療保険の負担を減らしてくれるかもしれないのである。

VIII. おわりに - DB 分析の教えるもの

この小論の目的は、学生の現象化能力を高めるために、DB 分析を利用する試みについて議論することであった。このような紙面での議論では、納得していただくことは難しいかもしれないが、 n 個の定性項目からなる DB では、記録された事態に関して、真に 2^n 個の局所点において、「生きた Gestalt」を掴み出すことができるのである。それは、このデータからは、それ以上望むべくもないだけの情報を取り出し、その事態性を立ち上げることができるということである。

ただ、ここで言うところの「生きた Gestalt」とは、各定性項目（観測量）の固有スキーマである。これはたとえば n 項目の定性見出しの付いた表に、いろいろなデータが入っているときに、各レコードを、 n 通りの文にすることができるかどうかにかかっている。たとえば、[目撃者-渡した人-もらった人-渡したもの] なら、次のような 4 通りの文にできる。

1. [目撃者]-[渡した人-もらった人-渡したもの]

二郎は、太郎が、花子に、バラを上げるのを、見ていました。
太郎が、花子に、バラをあげるのを、見ていたのは二郎です。

2. [渡した人]-[目撃者-もらった人-渡したもの]

太郎は、二郎が見ていた時に、花子に、バラを上げました。
二郎が見ていた時に、花子にバラを上げたのは、太郎です。

3. [もらった人]-[目撃者-渡した人-渡したもの]

花子は、二郎が見ている時に、太郎から、バラをもらいました。
二郎が見ていた時に、太郎が、バラを上げたのは、花子です。

4. [渡したもの]-[目撃者-渡した人-もらった人]

バラは、二郎が見ている時に、太郎から、花子に、渡されました。
二郎が見ている時に、太郎が、花子に上げたのは、バラでした。

ここでは、それぞれの文の組で、文の構成項目の 1 つが分離され、文を統合するスキーマとして使用されているが、こうすることで、様々な観点から、1 つの事態のそれぞれの局面を全方位的に見ることになる。逆の言い方をすれば、こうした全方位的な見方をするためには、各項目の固有スキーマが、分析者の中で「生きた Gestalt」でなければならないということである。われわれは、人の視点には容易に立てるが、物の視点に立つ訓練はされていないのではないかと思う。あるいは、目撃者の視点しか持ち合わせていない人とか、もらう人の視点からしか物を見たことがない人というのもいるかもしれない。ともかく、そういう偏った視点を、こうし

た DB 分析などの訓練で、猛省を促さなければ、事態性の多くの局面が見失われてしまう可能性がある。その結果として、環境破壊が日常化するのかもしれない。

DB 分析では、全方位的視点の欠落のために、事態性の局面の立ち上げに失敗すれば、即、真実から疎外されるということ、学生自身が直接体験できる。そこに DB 分析の最大の特徴がある。こうした優れた教育手段は、できる限り多くの先生に活用していただいて、独自の現象化の方法を学生たちに伝授してやっていただきたいと思うし、DB 演習の現象論的側面をもっと重視して、IT リテラシーなどという範疇に留めずに、もっと教育の基幹領域に位置づけるべきではないかとも思う。

注・参考文献

- 1) Maurice Merleau-Ponty , SENS ET NON-SENS : Les Editions Nagel , Paris , 1948 .
木田 元 他訳(1995) 意味と無意味：みすず書房 .
- 2) 丸山博道，個のうちなる普遍について，名古屋経営短大 紀要 43，pp67-78 . 2002 .
- 3) 丸山博道，権力性の繰り延べ原理に基づいた環境哲学，名古屋経営短大 紀要 46，pp67-84，2005 . 8) の記述を参照されたい .
- 4) Arne Naess , Ecology, community and lifestyle , Cambridge University Press , 1989 .
彼の Ecosophy の最も基本となる規範 N と仮説 H は次のように定式化されている .(p197)

N1: Self-realisation!

H1: The higher the Self-realisation attained by anyone, the broader and deeper the identification with others.

H2: The higher the level of Self-realisation attained by anyone, the more its further increase depends upon the Self-realisation of others.

H3: Complete Self-realisation of anyone depends on that of all.

N2: Self-realisation for all living beings!

彼にとっての、Self-realisation とは、self-realisation ではなく、self の s を大文字にした Self であることに注意されたい。それは単なる自己実現ではなく、大自己を実現することなのである。そしてそれは世界との同一化なのであり、正しい世界の把握なしには不可能なものである。それゆえ、筆者は、権力性を繰り延べながら、存在性を立ち上げることが先ではないかと言っているのである。

- 5) 丸山博道，啓蒙の再生と普遍道徳の役割，名古屋経営短大 紀要 44，pp61-82，2003 .
M. Horkheimer と T. W. Adorno は、『啓蒙の弁証法』の中で、次のように言っている。

「啓蒙が神話へと退行して行く原因は、ことさら逆行することを目的として考え出された、国家主義的、異教的等々の近代的神話のもとに求められるべきではなく、むしろ真理に直面する恐怖に立ち竦

んでいる啓蒙そのもののうちに求められねばならない。」

真理に直面するには、事態を全方位的に現象化する以外にはない。しかし「啓蒙」はそれを怠ってきた。啓蒙が再生されねばならない最大の理由がここにある。

6) Adorno, Theodor Wiesengrund, Negative Dialektik, 1966 .

木田元 他訳, 否定弁証法: 作品社, 1996 .

Adorno は、「否定弁証法」, 第二部 否定弁証法 概念とカテゴリー の <14 布置関係 (Konstellation)> で, 前節<13 個別的なものも究極的なものではない>に続いて, 次のように言っている .

「(個物の核心は,あの極度なまでに個体化された,あらゆる図式を拒否する芸術作品に比べることができる . そうした対象の, 個別化の極みの中に普遍的契機が再発見される . それは自分でも気づかぬまま, ある類型を分有している .) こうした普遍的契機は, 抽象という方法によらなくても, 諸概念を布置関係の中に配置することで見出される . この布置関係のもとでは, 分類的やり方にとってはどうでもいいもの, 厄介者にすぎない対象の特質が照らし出される . このことをよく示すモデルは, 言語の働きである . 言語は, 幾つかの概念をある事物のまわりに集めて互いに関連づけ, その関係を通じてそれらに客観性を与える . 概念がその内部でとうに切り捨ててしまったもの, 概念がそれでありたいと思いつつ, 到達できないこの「概念以上のもの」は, ただ布置関係によって外から表すしかない . 認識されるべき事物のまわりにさまざまな概念が集められると, それによってこれらの概念は潜在的に事物の内面を規定することになり, 思考が必然的に自分の内から排除したものを, 思考しつつ獲得することになる .」

DB 分析というものは,まさにこの Adorno の主張を納得するのに,最も適した教材である .

7) 丸山博道, 存在性の諸命題, 名古屋経営短大 紀要 42, pp91-102, 2001 .

これは, 存在はいかに現象化されるべきかを, 著者自身の Ecosophy としてまとめたものであるが, その体系は, 生態学的現象論というべきものであった . この体系から, 筆者は, ものごとを関係場の中に把握し, その存在性を了解し合うというという実践こそが, 普遍道徳であると言っている .

8) 丸山博道, Ecosophy の第一原理と道徳性, 名古屋経営短大 紀要 45, pp59-81, 2004 .

Ecofeminist である Ariel Salleh の立場から, 生態学的現象論の立場を再確認したものであるが, これは同時に, Naess の Ecosophy 批判でもある . 筆者は, Naess の主張自体を否定しているのではなく, deep ecology を, 包括哲学にするためには, 体系の深化が必要であると言っているのである . この包括哲学への展望については, 3)の論文を参照されたい . ところで, 生態学的存在論という呼称は, 今回この論文ではじめて用いたものであるが, この呼称は, 6), 7)の精神性を表現したものである . 存在性とは, 存在の事態性を現象化したものであり, 存在と事態は基本的に同義であるから, 筆者にとっては, これは生態学的現象論と同義である .

9) リレーショナル・データベースを特徴付ける 3 原則：正規化・コード化・一意化について。
正規化

表の各セルに最も還元された形態のデータを 1 つだけ格納しようとする原則。表を結合したり切り取ったりすること（関係代数）だけで、目的の情報に到達できることを保証するためには、1 セル 1 データの原則が必要になる。

コード化

項目によっては、極めて複雑で長い文字列データを、繰り返し入力せねばならない場合があるが、そのような場合、常に同じ入力を保証することは困難である。そのような場合に、できる限り、コード表に定義されたコードを入力することで、記録の整合性を保とうとするのが、この原則の目的である。コード化は、データの整合性を保つために、実質的に欠かせない原則であるが、そのほかに、コードの定義に様々な項目を絡ませることで、業務を多様な要素と結びつけ、その豊かな側面を浮かび上がらせるというメリットもある。

一意化

これは 1 回の業務に関して、1 つの記録を残そうとする原則である。同じ記録の重複を防いで、表を業務の集合として表すために必要になる、この原則によって、関係代数が非常に単純化される。実際には、データベース管理システムに、予め、幾つかの項目（候補キー）を指定しておき、その一連の項目が同一であるデータが再度入力された時には、それを排除するような仕組みを作っている。各表で、候補キーに組み込まれた項目を主キーという。